

---

# 僕の物語

逃げ水

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の物語

### 【Nコード】

N6340E

### 【作者名】

逃げ水

### 【あらすじ】

一人の少女が旅に出る。世界を救うために。一人の少年が旅に出る。一人の少女を護るために。

## エピソード

かつて、世界の中心にはルーンを生む大樹があった。

ルーンは人々が生きていくために欠かせず、また化学・機械技術・魔法の発展に多いに必要とされた。

しかし、しだいに大樹は枯れはじめた。

それを知った人達は、大樹は我の物だと言い争い。いつしか戦争になった。

そして、その戦争は大樹を枯らさ原因となった。

しかし、勇者が自分の命を犠牲にし、新たなルーンとなった。

それを嘆いた女神は天に帰り、天使を使わした。

「私が眠れば、世界は滅ぶ。私を目覚めさせよ」

女神が使わした天使は神子を生み、神子は女神を目覚めさせるため聖地を目指す。

そしてまた一人、聖地を目指す神子が生まれた。

## エピローグ（後書き）

初っ端から不安が頭を過ぎります。果たし完結出来るのだろうか。  
一応構成は出来ているのですけどね。

まあ、下手くそな作者ですけど、最後まで付き合っただけなら幸いです。

## 第1話 守護の儀

森に囲まれた小さな村。その広場では一人の少女を中心に輪が出来ていた。

「神子様、おはようございます。」

「神子様、今日は守護の儀の日ですね。」

「神子様、今回の旅頑張ってください。」

老若男女誰もが神子と呼ばれる少女、アリス・ハービィングに声をかけていた。

「は、はい。皆さんの期待に応えられるように頑張ります。」

アリスは、腰まである長い金髪を揺らしながら村人一人一人にきちんと返事をかいしていた。  
そうしているうちにふと思い出した。

「皆さんすみません、もうすぐ儀式の時間なので。」

「そうですか。もうそんな時間でしたか。」

村の長老のお婆さんがアリスの前に一歩近寄った。

「今回の守護者はきつと素晴らしい守護者でしょう。そして必ずや神子様をお守りするでしょう。神子様に女神エステルに加護がありますよう。」

長老が手を組み祈ると、村人達も一斉に祈りだした。

「さあ神子様、早く教会の方に。私達も後から参ります。」

「はい。」

返事を返したアリスは教会までの道を歩き出した。

教会までは木々に囲まれた一本道。

葉は風に揺られ優しい歌を奏で、木漏れ日が眩しく光り、その光りはアリスの金髪をより一段と輝かせていた。

「ガサ！」

そんな時、茂みから怪しい音がした。しかし、アリアはその音を怪しむわけでもなく不思議がるわけでもなく。ただ苦笑いをしながら振り向いた。

「そこで何してるの？レイス。」

「何って、ドジな幼なじみがドジをしないか見守っているんだ。」

そうして茂みから現れたのは、茶色の髪をした少年。レイス・ギルバーシュだった。

「私、ドジじゃないよ。」

アリスは、レイスのドジ発言を否定した。

「ほう。ドジじゃないと。」

レイスは、嘘つけという顔をしてアリスを見る。

「この前の掃除の時、両足をバケツに突っ込みそのまま転び、壁に頭から突っ込んで。これがドジじゃないと！そもそもどうすれば、一つのバケツに両足がはまるんだ！」

アリスは、必死に言い訳を考えながら言葉を紡いだ。

「えっと・・・それ・・・は・・・」

そして、閃いたと言わんばかりの顔をしてこう言った。

「そう！バケツが入ってくれて・・・イタ！」 全てを言い切る前にレイスのげんこつがアリスの頭に落ちた。

「嘘つくな！ったく、これが神子だってんだから驚きだ。」

「イタタタ。何も殴らなくてもいいでしょ。」

「お前が嘘つくからだ。それより、今日守護の儀なんだろう？どんな

守護者がでるんだろうな。」

目をキラキラさせるレイス。

「さあ？それは解らないよ。」

「ほら、この前の人は凄かったよな。あのでかいトカゲみたいな奴。」

「ドラゴンだよ。」

やや呆れ顔になるアリス。

「なあ、俺も一緒に居ていいか。」

「！！駄目だよ！守護の儀は神子一人でやらなくちゃいけないんだから。この前学校で習った……レイス、学校は？」

「サボった。」

さもあたりまえのようにレイスは言った。  
そんなレイスは何故か変な自信に満ち溢れていた。

「はあ、またシェラ先生に怒られるよ。」

アリスは先日起きた出来事を思い出した。  
いつもは温厚なシェラ先生が、六日連続で宿題を忘れてたレイスに  
ついにキレた。

顔は般若のようになり、罵倒レベルの説教が1時間も続いた。  
クラスの皆は恐れ上がり、怒られているレイスは席を立たされながら  
寝ていた。



「大丈夫だ、きっと。」

二人がしばらく歩いていると、教会がみえてきた。

「なあ、俺もさ。その旅についていってもいいか？」

「ふえ？」

いきなりの質問に戸惑うアリス。

「でも、凄く危ない。死んじゃうかもしれないんだよ。」

「大丈夫だって。毎日、剣の修行してるから。」

自分の腕を叩いてレイスは笑う。

「……考えておくね。」

そうこうしているうちに、二人は教会に着いた。

「お待ちしておりました、神子様。」

教会の入口で教団の人が二人を出迎えた。

「それでは神子様、守護の儀を始めますので奥の祭壇まで来て下さい。」

「はい。それじゃ行ってくるね。」

アリスはそう言って、教会へと入って行つて。

教会の雰囲気は何時もと違い。二人の足音だけが不気味に響く。

守護の儀の祭壇は民間人が入れる神殿のさらに奥にある。

神殿の奥、女神エステルをかたどった像の前に来ると教団員の人は祈りを捧げた。

「我らが偉大なる女神エステル様よ、今その道を開け祭壇への道を示したまえ。」

言い終わると、何か動く音と共に像が動いてさらに奥に行く為の道が現れた。

「わゝ、すごい。」

アリスはその光景に驚かされた。

「ええ、神子様でも神殿の儀と試練の儀以外はお見せ出来ないの。

」

そして二人は祭壇の間に着いた。

「それでは神子様。その魔法陣の前に。」

アリスが一步足を踏み出す。

「今から神子様には、その魔法陣に向かい召喚の呪文を詠唱してもらいます。その後、守護者にたいし説得、または戦闘によって契約をしてもらいます。」

アリスの顔が引き締まり、緊張感が漂う。

一つ大きな深呼吸して。

「神子、アリス・ハービィング。今より守護の儀を始めます。」

集中し魔力をたかめる。

「我は神子アリス・ハービィング。我、女神エステルを呼び起こすものなり。我命じる、我を護り共に女神エステルを起こす守護者よ、今我の前に姿を現し汝の力を示したまえ。」

呪文を詠唱し終わると、魔法陣の中のルーンがよりいっそう濃くなる。

「神子様、お下がりください。間もない守護者が現れます！」

教団員が叫ぶ。しかし、アリスはその光景を前に一步も動くことが出来ない。

「神子様！！早くお下がりください！そこは危険です。」

一步も動かないアリスに不安を感じた教団員は、とつさにアリス服を掴み引つ張ろうとした瞬間、魔法陣が光りその光にアリスは飲み込まれた。

しかし、その光はすぐに収まった。

「み、神子様！ご無事ですか！」

教団員は必死にアリスを捜す。

アリスはすぐに見付かった。

先程と同じ位置に腰を抜かして座り込んでいた。

「神子様！・・・ご無事でなによりです。」

心底安心した顔で教団員がアリスに近寄り、手を貸して立たせた。

「守護の儀は成功です。さて、今回の守護者は？」

「あ、あそこです。」

アリスが指差した方は、煙りで見え難いが確かに守護者の影がそこにあった。

## 第1話 守護の儀（後書き）

執筆中、大変な事に気が付きました。第1話が始まったのにヒロインしか出ていないんです。

残念な事にレイスは主人公ではありません。

えっ、最後のオチで解っていた。

という訳で次話から主人公が登場いたします。

後、感想・アドバイ스가あつたらどんどん下さい。それが作者の励みであり、この作品がより良くなる素です。

## 第二話 開かれたページ（前書き）

更新が遅くなりすみませんでし。

最近忙しくなかなか暇がありません。

それでもこの作品を読んでくれる皆様に感謝することは忘れません。

## 第二話 開かれたページ

只今の時刻12時50分。

そう、中学生の俺にとつてとても大切な昼休みの時間だ。弁当も食べ終わり、予鈴が鳴るまでの間の至福の時間だ。こんな時は一人でおとなしく・・・

「流石は我が親友、羽山 修。こんな時まで本を取り出し受験勉強とは、だてに某国民的有名漫《○るおくん》のあだ名を欲しいがままにするだけのことはある。」

「まてまて、俺は眼鏡もかけてないし勉強も嫌いだ。とゆうか誰だ、そんなあだ名をつけたのは。」

「俺だ！」

「そんな不名誉極まりないあだ名をつけるな。」

俺に新しい不名誉なあだ名をくれたこいつは中村孝輔。親友と書いてマブダチと言う間柄だ。

「しかし、おかしなものだな。」

さも、不思議そうな顔をする孝輔。

「何がだ？」

「そんだけ、本を読んでいて勉強嫌い。どちらかというと運動好きなんて。」

結局それが。

「人を見かけで判断すなということだ。だいいち本を読む、イコール勉強好きは成り立たない。」

小さい頃から毎日、暇があれば本を読んでいたため、よく勘違いされ今までも同じような事をよく言われてきた。

「これで十三回めだな。」

「今日だけでか？」

「ああ。」

いい加減うんざりしてくる。

「ご愁傷様としか言いようがないな。」

「おい、親友を見捨てるな。」

「どうしようないだろ。世間一般ではそう見られてんだから。」

確かに。自分でさえ終始本を読んでも奴がいれば勉強好きと思うだろう。

「本当になんとかならないか？」

「無理。」



こいつは本当に俺の親友なのか疑いたくなる。

そんな雑談をしていると昼休みの終了を告げるチャイムがなった。

「しまった！貴重な時間を、馬鹿のために費やしてしまった！」

「馬鹿とはなんだ！○るお！」

「○るおって言うな！」

その後、とくに何もなく時間は過ぎ今は放課後。部活に行く者、家に帰宅する者人それぞれの行動をとる。  
俺は部活に入っていないため、家に帰る。

「じゃあな、本屋。」

「おう。」

我がクラスメートと別れを告げる。

そういえば気付いたかもしれないが、俺の本当のあだ名は本屋だ。けして家が本屋だからという訳ではない。

ただ毎日のように本を読んでいたためついた。

しかし、俺が本を読むようになったのには訳がある。

「ただいま〜って言うても誰もいないけどね。」

我が家に親はいない。

小さい頃俺を親戚に預けた両親は旅行に出かけたが、その旅行先で交通事故にあい亡くなった。

今では両親の残した遺産と保険金、叔父叔母の仕送りで生きている。

「さて、今日はどれにするかな？」

そう言うて向かうは親父の部屋だ。

ここで本題に戻るが俺が本好きになった理由、それは親父の部屋を埋めつくさんとする親父が執筆した本、これが原因だ。そう、俺の親父は小説作家だった。

そのため、小さい頃から絵本がわりに良く読みいつしかそれが当たり前になっていた。

いつものように本棚から一冊取り出し、親父の作業机の上の原稿用紙に目が止まった。

「親父の奴この後なんて書くつもりだったんだろ。」

その原稿は親父が死ぬ前に書いていた小説だった。

内容としては学園ラブコメディー。

いいところで文が止まっているため、非常に続きが気になる。

俺の夢は親父と同じ小説作家、そしてこの続きを親父の代わりに書き上げることだ。

だがその道のりは険しい。何故なら親父は全国的にも有名な作家だからだ。

故に中途半端な文才で後を継げるほど甘くはない。

「つつか。親父の奴、今の俺と同じ歳で作家デビューって。」

そう親父は15歳の時にデビューし、初めて出した本は親父をあつ

という間に有名作家にした。

正直、あの馬鹿親父に負けるのだけは俺のプライドが許さない。  
でも勝てないのも事実だった。

「はあ、なんかいいアイデアはないかな。」

新たなアイデアを求め机を漁る俺。なんか情けない。

「ん、なんだこれ？」

机を漁って見つけたのは一冊の分厚い本だった。

「もしかして。」

嫌な予感がする、開けてはならないと本能が告げる。しかし誘惑に  
勝てなかった俺はその本を開いた。

『十月十四日。今日、修が俺の小説を楽しそうに読んでいた。余り  
の可愛いらしさに抱き着きたい衝動刈られも堪える俺、ああ、今の  
俺は幸せ過ぎる。』

「・・・・・・・・」

親父の日記だ、間違いない。

「なにを考えているんだあいつ。」

またページをめくる。

『六月七日。今日、小夜さんに俺の小説が褒められた。天にも昇る

思いだ。このままいい関係になつたりして。やばい期待が膨らむ。」

年からみて、たぶん親父が高校の時だ。  
そうか、あいつはこの時から馬鹿だったのか。  
ちなみに小夜とは俺の母親の名前だ。

「なんだ、この日記は。危な過ぎる。」

ええもう読む事さえ危険だ。  
でもなぜか俺の手はページをめくる事をやめない。  
そして、最後のページにたどり着いた。  
そのページだけは今までのとは違う雰囲気放っていた。

『四月二十日。俺はあの旅を小説にしようと思う。なぜなら、それが俺にできるあいつへの唯一のはなむけだからだ。でも手が進まない、本当はそれが間違いだと知っているからだ。』

年は15の時だった。

「なんだ、これ？全く意味が分からん。」

しかし俺はあるおかしな点に気がついた。  
この日記の内容からみると、親父の初めて書いた小説は旅行系のやつだ。しかし親父が本当に初めて書いた小説は恋愛ものだった。

「さてよ。とゆうことは。」

そう親父が初めて書いた小説は別に存在した。  
それに気がついた俺は、今度は部屋じゅうを漁った。

「くそ。何処にあんだよ。」

日記の内容から書いた事は間違いない。

俺が読んだことのない親父の作品はひとつたりともない。

なぜなら親父は書き原稿をそのまま読ませてくれたからだ。

だから、ボツになり世間に出回らない作品も俺は読んだ。

でも、唯一読んだことがない作品が存在した。それは俺の心をおおいに弾ませた。

しかし何処を捜しても見つからない。

そこでふと気がついた。

「そつか、すでに捨てたのかもしれないのか。」

よく考えてみれば分かることだ、何十年も前のあるはずもない。

「はあゝなんかいつきに疲れた。」

諦めてドアを開けようとすると。

「・・・すけ・・・たす・・・て・・・」

「!？」

人の声？

「・たすけ・・・すけて。」

「誰だ！」

部屋を見回しても人影は見当たらない。でも、声はしだいにおおきくはつきりと聞こえてくる。

「助けて、彼を救ってあげて。」

「だから誰なんだよ。どこにいるんだ、姿を見せろよ警察に通報するぞ！」

「助けて、彼を救って。」

どうやら人の話しを聞く気がないらしい。

「いい加減にしろ！」

そう叫ぶ同時だった、俺の足元から閃光が走るといきなり魔法陣らしきものが現れた。

「何だよ！？何なんだよ、これ！？」

そして魔法陣はよりいっそう輝きをまし、俺は光にのまれた。しかしこれは始まりに過ぎなかった。

そう俺の物語は今、最初の1ページが開かれた。

## 第二話 開かれたページ（後書き）

感想・アドバイスなんでもいいので是非何かあったら送って下さい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6340e/>

---

僕の物語

2010年10月28日07時31分発行